

# 陽の里

発行 平成11年1月1日



社会福祉法人 新生会  
総合ケアセンター

サンビレッジ

No.66

## テーマ 高齢者を取りまく世間体



## 故郷ドライブ

杉本真枝

私の母はどうかすると娘の私の名前も忘れてしまう時がある。しかし、自分が生まれ育ち、そして近くに嫁ぎ、長年住み慣れた乙原だけは忘れた事がない。母がサンビレッジ新生苑にお世話になって早や二年になります。その母にふと心をよぎるのは、ふる里のことらしい。私が面会に行った折、車椅子で外に出ると、必ず西の方を向いて「乙原ヤーイ」と呼びます。そんな母にすらん棟初めてのふる里ドライブが企画されました。いよいよこの計画が四月十七日実施されました。そして、この日を心待ちにしていたのは母、娘の私、そして他に、親戚の方、近所の方達でした。すずらん棟職員二人の方に送って頂き、午前十時、家に到着。近所の人達も手づくりの花束と笑顔で迎えてくださいました。久し振りに我家に入り、まず仏壇の前でじっと手を合わせました。その後記念写真を撮ったり話をしたり、驚くことに母も近所の皆さんの名前を覚えており、本当に懐かしいのと嬉しい思いが私にも伝わってきました。お昼には近所の人と一緒に箸ご飯と母好みの手料理を囲んで、母も、もりもり食べてにぎやかに過ごしました。小さな村の出来事はたちまち人から人へと伝わり、後日「なんで知らせて呉れなかった」と残念がられた人もみえ、今度は是非知らせてほしいと、母だけでなく、皆さんに待たれる企画となりました。次に会えるのを楽しみにしております。

# 家族と他人の手

理事長 石原美智子

特別養護老人ホームのサンビレッジ新生苑である日、ヘルパーさんが言いました。「私たち介護者がどんなに頑張っても、家族にはかなわない。でも、その家族がなかなか来てくれない。私たちがこんなに一生涯介護しているのだから、少しでも家族にのぞいてほしい。お年寄りがかわいそうだから」でも、私は言いました。「家族の愛情が一番ということとは分かるわ

でも、もし私とその家族だったら、家族のくせに介護をしないとかわれるのではないかとと思うと、敷居が高くて面会に来にくいわ。介護ができないから預けているのだからこちらからそんな要求をすると、何か口実を設けていよいよ足が遠のくんじゃないかな」

在宅介護の会社、新生メディカルのヘルパーさんが、ある日言いました。「もう少し家族が手を掛けてくれたらお年寄りの状態がもっと良くなるのだけだ」

私は言いました。「もし、私が家族だったら、そんなことをヘル

パーさんが考えていると思ったら、もう来てほしくないわ」

そうなんです。一生涯懸命に介護していると思っている人ほど、家族への要求が大きくなります。

家族が介護するのが当たり前、この日本人がしつかりインプットしているマインドコントロールをどうしたら解くことができるのでしょうか。

「家族」「介護」「愛情」と錯覚しているようですが、これらの相関関係は必ずしもイコールではありません。むしろ介護は「女手」が結論ではないでしょうか。その証拠に施設の玄関前に駐車した運転席から出てこない息子の存在や、二十四時間巡回ホームヘルプ事業の開始時にした調査結果で、息子との同居は利用ゼロというところに表れていると思われまます。この「家族」「介護」「愛情」の錯覚は何も男性ばかりでなく、本当は女性自身の中にも強く存在すると思われまます。それは、二十一世紀を目前にするまで、保育園に子供

を預ける時、「保育に欠ける子」というレッテルを張られるにもかかわらず、プライドをわきまにおいてその書類になつ印をしてきたからです。子供を保育所に預けながら働く女性は、まるで子供に愛情が無いがごとくに言われ、また、それに対しての大きな反論が女性自身からも起きなかつた事実があるからです。この建前と本音の間に介在するのが「世間体」というえたいの知れない言葉です。分解すると意味不明のこの言葉が幅を利かせているのが介護の世界です。

親不孝をどれだけ勧めてみても、親に対する情は消せないのですから、愛情論を他人がとやかく言う「世間体社会」が早く無くならないかと願っています。その時こそ、本当に心から自然に親孝行ができる社会になると信じています。



▲在宅でのヘルパーの巡回サービス

## 「敬老の日」ステキに変身」

家族交流会 大窪明美

敬老の日の行事の中で『誰もが何時までも自分らしくお洒落を楽しむことができるように』というテーマで、ヘア・メイク・改良服の専門家に協力を得て、ファッションショーを行いました。

「こんなに年をとってからお洒落なんて」

と、はずかしがっていた方も、専門家の手でステキに変身し、元気な時着ていた服を障害に合わせ改良し、身にまといモデルに変身しました。家族からは、

「元氣な時の父の顔に…」「お婆ちゃんのおんなうれしそうな顔、久しぶりに見た」

と、感激の声が聞こえました。障害をもたれても、その人がその人らしくというあたりまえの事が、こんなにも素敵なことなのかとつくづく感じました。



# 「施設と家族」

サンビレッジ新生苑と関わりを持つようになってからもう十年以上になる。このところ二年間は外部評価委員として施設の運営に間接的に参加させてもらっているから、母親の介護をお願いしていた時と立場はだいぶ違っているけれども、意見を述べる時には何時も、できるだけ入居者の家族としての立場から眺めたものにしてしようと心掛けている。言うまでも無いことだが、サンビレッジのような施設がスムーズな運営をしていくためには、そこに関わるあらゆる立場の人たちの協力が不可欠で、直接入居者の世話をしてくださっている職員の人たちの考え方だけでは成り立たない場合もたくさんあると思う。

評価委員 金丸義敬

家族の立場はとても微妙なものである。入居者を持っていると言うことは、当然それ以前には自宅での筆舌に尽くせないような献身的介護の時期があって、その負担が無くなったという開放感と、一方で、肉身の介護を他人にお願いしているというある意味の後ろめ

たさと、さらには、誰もが同じように持っている日常の様々なストレスと、そういったものを全てが一緒になって家族の心の中を占めている。施設の中で家族は、往々にして職員の人たちに感謝の言葉を連発するが、実際は、その裏にとっても複雑な感情が錯綜しているものである。難しいのは、入居者と家族とが入居前に互いの関わりをどう持っていたかという歴史がそれぞれ全く違うことで、他からそれを伺い知るのには不可能に近い。特に、入居以前の関係があまりうまくいっていないような場合、家族の感情は複雑さを通り越して、混沌と言ってもいいような言いにくい状態にある。しかし、敢えて言うと、そういう心の中を、ためらわずに、できるだけ多くの職員の人たちに知ってもらおうように心掛けることが家族には必要だろう。そうすることで家族と職員の結びつきはとも強くなるだろうし、一方で、職員の人たちも、それまで背負ってきた家族の歴史



的背景を十分理解し、お互いの意志が伝わるまで、話し合いの場を持つことも必要ではないかと思う。職員の人たちによる入居者の介護もより適したものになっていくだろう。

入居者が100名ならば、100名の入居者と家族の背景があり、人間の人格が個々で違うように、家族の思いのありようはそれぞれで全く違うと言うことをできるだけ理解してほしいと思う。施設の原点は、入居者が喜びを感じることで、それが実現するよう努力すること。そして、それは日々、入居者の介護に携わるヘルパー、看護婦以外に家族、地域の方のボランティア等、さまざまなたたかみでいる人たちが互いを理解しあうことから始まる。

## 「日本を学ぶ」

リチャード フレミング

平成十年から十二月の三ヶ月間、北欧デンマークから日本に文化・語学を学びにサンビレッジのひまわりホールに来ました。

初めは、日本語が分らず、お年寄りとのコミュニケーションがむずかしく、深いところの話ができず、さびしかったが、手をにぎって優しい声で「がんばってな」と言われると、とてもうれしい気持ちになりました。

日本人は、自分ばかりでなく、他の人のこともデンマーク人以上に大事にする。その思いやりの気持ちにも感動しました。

僕にとっても、この三ヶ月は一生の宝となりました。

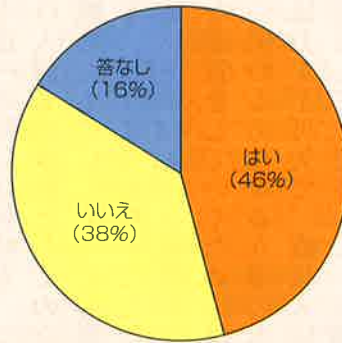


連載

# 家族評価アンケート(3)

## 《医療・リハビリ面》

**Q1** 終末期、濃厚な医療を望まれますか。



特養は生活の場である為、医療を望まれる方の終末期は、病院への入院をおすすめします。

又、「いいえ」と答えられた方の中には「高齢の為本人が苦痛を伴うのは嫌だから、短くても少しでも苦痛をこつて穏やかに過ごすことを望む」といった意見が多く見られました。

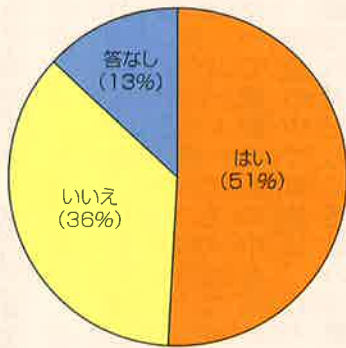
どちらの場合も『本人がどんな終末を望んでおられるか』が、重要なことです。

しかし、本人に痴呆や、意識障害のある場合、その確認はむずかしく、

そういった場合、家族の意見がとても大切になってくると思います。その時に備え、家族の中で『死』について話し合っておかれることも大切なことではないでしょうか。

サンビレッジ新生苑では、その人が望まれるその人らしい人生を、家族の方と共に支えていきたいと思っております。その為、その場面場面でケアカンファレンスへの参加等をお願いすることもありますので、ご理解いただきたいと思います。避けられない死を、どう迎えるのかを一緒に考えさせていただきます。

**Q2** 積極的なリハビリを望まれますか。



今、当苑では、理学療法士、作業療法士、言語療法士の専門職より指導を受け、生活リハビリを中心に行

っています。高齢になってからの訓練は、時に辛く厳しいこともありまので、普段の生活の中の日常的な動作の中で、その方の残存能力を維持していただけたらと考えております。たとえば、ベッドから車椅子に移る介助をする時、健側の足に力が入るよう支えながら体重をかけてもらったり、楽しみながら手や足を動かせる作業や、レクリエーションにも力を入れております。



▶サンビレッジ国際医療福祉専門学校では、生活リハビリの一環として、家庭で片手でも料理ができるように料理教室が年に数回開かれています。

ステキな車を頂きました



1998年2月に行われた長野オリンピックを通じて、トヨタカルディナ(1800ccワゴン5人乗り)を寄付していただきました。入居者のドライブやショッピング、また職員の仕事外出等に使用しています。ありがとうございました。